

## 施設短期作型向トマト品種の育種

(第1報) 'トマト久留米交101号'の育成

松尾誠介・神山利一・菅原祐幸

(野菜試久留米支場・野菜試育種部)

トマトの施設栽培を取巻く経営的条件の変化と作型動向を考慮し、対象作型を明確にした育種目標を定めて、広義の生態育種を行っている。その一環として施設2作型に適応し、高度の栽培技術を要せず収量の安定的確保を目標とした短期作型向適品種・素材の開発を1968年より計画した。短期作型向の草姿特性としては「心止り」草姿の適応性に着目し、心止り草姿の優良形質親並びに萎ちょう病(J<sub>1</sub>)抵抗性親の育成を目的とした系統群に分けて育種を行った。優良形質親群についてはほぼ目標に近い系統が得られ、「トマト興津12号」との交雑により「トマト久留米交101号」が得られたので、その育成経過と特性の概要を報告する。

## 1) 育成経過

① 優良形質親の育成 “Money Maker” と “楊子”あるいは “デリシャス”, “デリシャス” と “小塩フルーツ” 及び “栗原” と “デリシャス” の組合せ後代並びに “大型福寿” (タキイ) 及び “福寿2号” (タキイ) 自殖後代について選抜を進めた。選抜目標は心止り草姿で草姿大柄の強勢, 生育後期に株疲れが起こりにくく, かつ果実形質は大果で整形果の多収形質とした。栽培は無加温小型パイプハウスの春作・秋作で行った。交雑後代の

選抜の結果, 1973年に (M. M. × 楊子) × 楊子の後代群より5系統 (M. M. × デリシャス) × デリシャスの後代群より1系統, 栗原 × デリシャス後代群より1系統, 福寿2号自殖後代群より2系統及び大型福寿自殖後代群より6系統を優良形質親とした。

② F<sub>1</sub> 系統選抜 萎ちょう病抵抗性親系統として “トマト興津12号” を父株に当て, 優良形質親系統を母株とした F<sub>1</sub> 15系統について, 1973年より選抜を開始した。その結果, 大型福寿自殖後代群との組合せを有望と認め, その内4 F<sub>1</sub> 系統に “トマト久留米101~104号” と命名し, 1975年より系統適応性検定試験に移した。総合判定の結果, “トマト久留米交101号” を有望と認めた。

## 2) 特性

心止り草姿で, 一般高性品種に比較して花芽の分化・発育はおう盛で短期間に一定の収量が得られ果実は第1表に示すように, そろいがよく, 空洞・裂果の発生が少ない。栽培方法は一般栽培に準ずれば茎葉の繁茂が伴わず, 小果を生じやすいので, 葉面積の確保を図るかん水・施肥管理と摘果による着果数の制限が肝要である。適応作型としては抑制栽培とし, 春作にウリ類等を作付けするハウス2作型としての利用が最適であろう。

第1表 トマト久留米交101~104号の収量性

供試系統 品種 <sup>a</sup>	収量 (a当り)	良果平均果重				果のb 揃い	空どう果 <sup>c</sup>			裂果 <sup>c</sup>		
		全期	前期	中期	後期		前期	中期	後期	前期	中期	後期
トマト 久留米交101号	728 <sup>kg</sup>	147 <sup>g</sup>	153 <sup>g</sup>	145 <sup>g</sup>	139 <sup>g</sup>	1.5	1.8	1.7	1.6	1.5	1.5	1.4
トマト 久留米交102号	646	147	154	150	132	1.5	1.5	1.7	1.5	1.3	1.3	1.3
トマト 久留米交103号	629	141	152	145	129	1.7	1.0	1.2	1.2	0.8	1.0	1.3
トマト 久留米交104号	738	143	143	144	133	1.6	1.5	1.7	1.5	1.0	1.0	1.4
耐病 段とびオーズ	744	142	146	141	135	1.7	1.6	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8

a 久交101号、同102号、耐病段とびオーズは1975年及び1976年秋作、他の系統は1975年秋作の系適7場所の平均

b 1:良~3:不良。 c 1:少~3:多